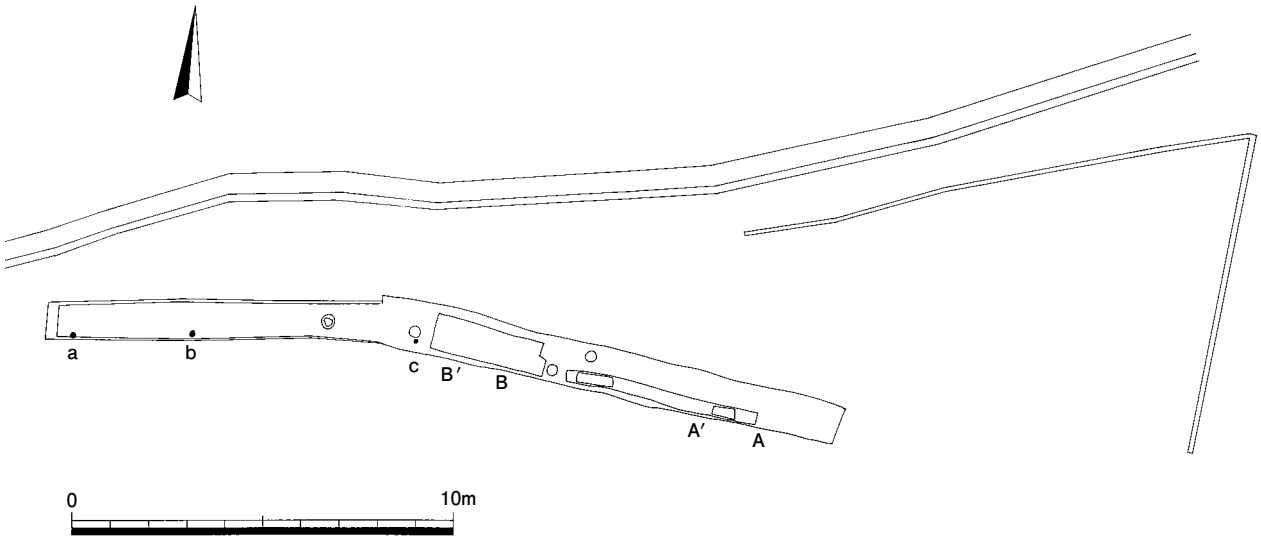


Fig.4　遺構分布図（1/200）

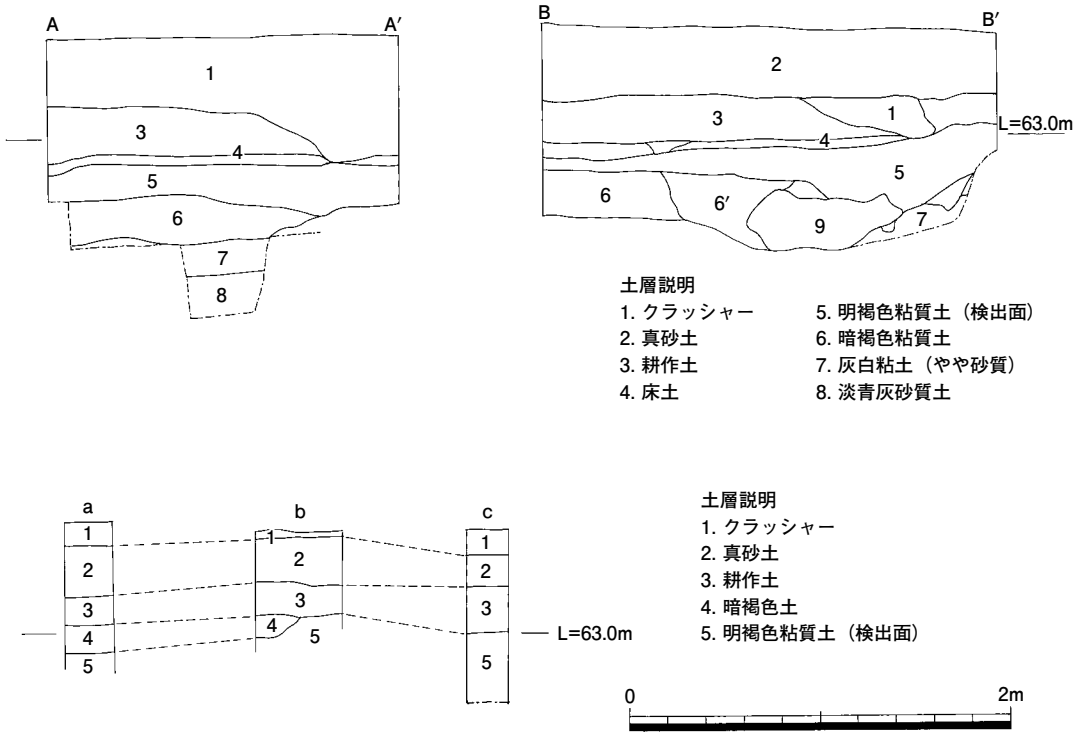


Fig.5　調査区土層図（1/40）

集落の範囲等は判断できないが、周辺の調査や以下の章で記すような中世村落が検出されていること、また立地や層位から中世の可能性が高い。

Ⅳ　おわりに
―発掘調査からみた中世村落―

Ph.1　西半調査区全景（東から）

Ph.2　調査区内土層（A—A'）

Ph.3　調査地点から荒平城を望む（南西から）

ここでは発掘調査で判明した内野遺跡周辺の北は清末遺跡、南は脇山遺跡の中世村落の状況を概観する。調査事例は圃場整備に伴うもので、未だ面的な広がりで把握することができないが概ねの傾向を記すことにする。

既述した通り南北で地形が大きく異なり、南側の傾斜が大きい内野遺跡から脇山遺跡にかけての一帯と北側の平坦な南北に細長い低位段丘面に遺跡が立地した入部地区に分けられる。中世における領地支配もほぼ地形に即して広瀬から脇山にかけては12世紀以降に背振山領であるのに対し、内野、入部は12世紀後半以前に成立した安楽寺（太宰府天満宮領）領の入部庄であった。しかし、内野より北西側の長峯は先の嘉保三年（1096）の施入の範囲に入っていたので、長峯、内野一帯は入部庄と背振山領が錯綜していた可能性がある。

発掘調査事例から中世の集落（居住地区）をみると南側の脇山Ａ遺跡、峯遺跡、内野遺跡、広瀬遺跡では12世紀代以降の集落が検出されているが、11世紀に遡る遺構、遺物は現在までのところほとんどみない。また、脇山、内野周辺の沖積地と丘陵、段丘部の峯遺跡では集落の掘立柱建物の状況が異なる。

脇山Ａ遺跡５次Ｃ地点①では居住区を区画する溝は無く掘立柱建物が散在して検出された。それに対し、脇山Ａ４次第12地点②では掘立柱建物や柱穴の密度は高くないが、水路に限られた居住区内に青磁椀を副葬した土壙墓や鍛冶炉が検出され、５次地点より上位階層の居住区の可能性がある。

峯遺跡は比高差の大きい段状となっているが、周辺の沖積地からは一段と高い。１次③、２次２区④で12世紀から14世紀前半代までの集落が検出されているが、柱穴や掘立柱建物が集中する範囲（ユニット）がみられる。第２次２区は尾根線が削平された可能性があり、さらに広範囲に密度高く広がっていたとみられる。周辺の沖積地と比較し洪水から免れる優位な自然条件に起因し、集中度が高く存続期間が長かった可能性がある。第２次５区⑤では14世紀後半から近世までの遺物が出土する集落が検出された。１次、２次区２の調査区よりさらに高位置にあり、明治まで形成されていた谷部の峯村の近くに位置している。

内野遺跡では広範囲に集落を検出した事例は無いが、丘陵の尾根先端に位置した２，３次Ａ区⑥で集落の一部が検出された。近接した南西谷部の位置に中山の集落がある。北側の段落に幅４ｍの濠で

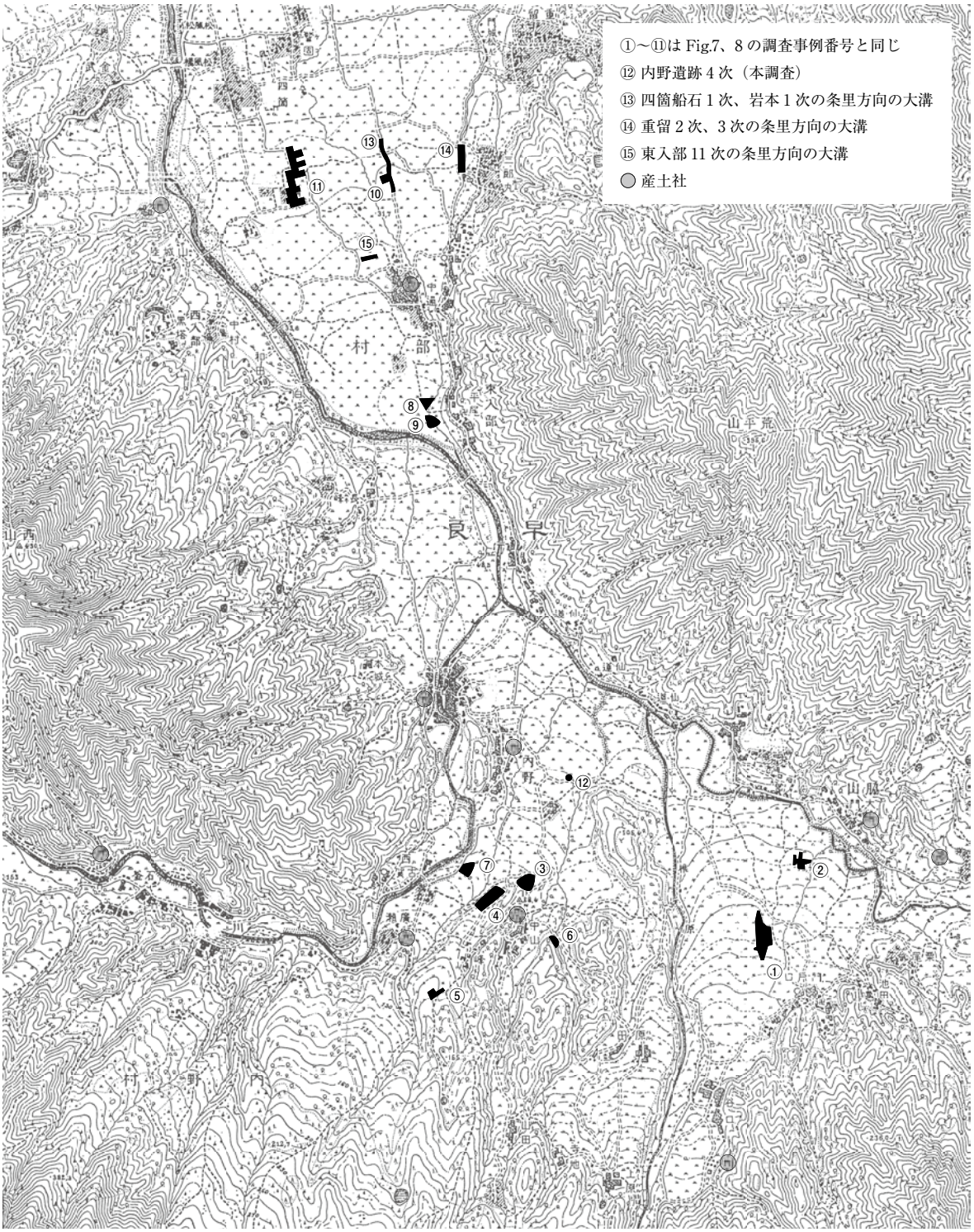
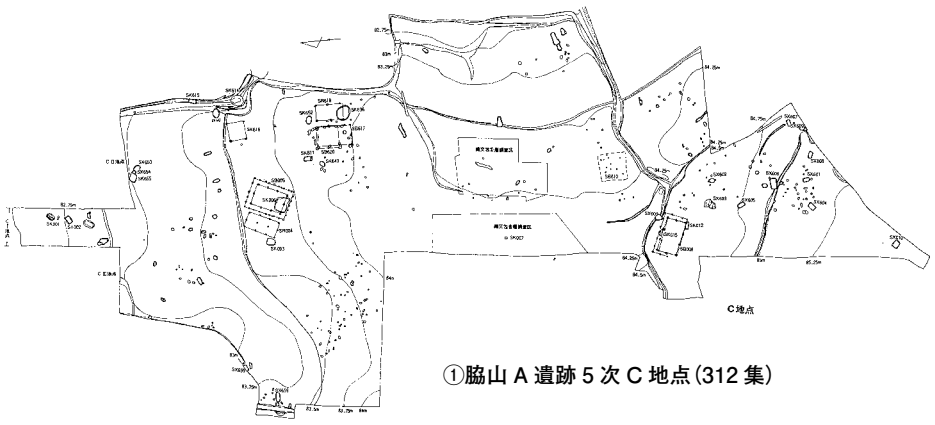


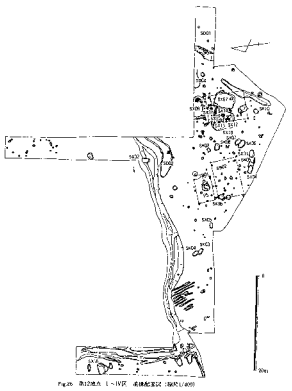
Fig.6　周辺遺跡調査地点分布図（明治33年　1/30,000）

限られた中に掘立柱建物や土壙が検出された。12、13世紀代の土師器や陶磁器が主に出土しているが、濠から出土した足鍋や土壙から出土した土師質の擂鉢は時期が下るとみられる。

広瀬１次⑦は室見川の右岸近くの沖積地に位置する。方形に巡る可能性がある幅４ｍの溝が検出され、陸橋を設けている。溝の内部から２×３間の掘立柱建物１棟と土器焼成壙が検出された。時期は12～13世紀と考えられる。比較的、上位の階層の屋敷地である可能性がある。

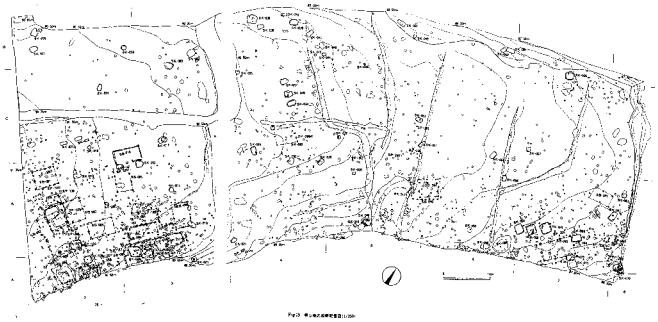


①脇山 A 遺跡 5 次 C 地点(312 集)

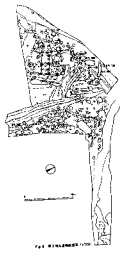


②脇山 A 遺跡 4 次第 12 地点
(269、311 集)

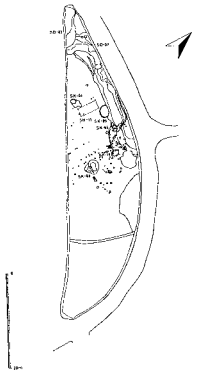
③峯遺跡 1 次(197 集)



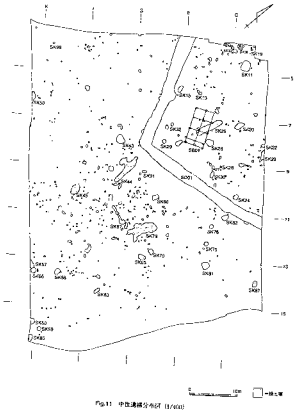
④峯遺跡 2 次第 2 地区(618 集)



⑤峯遺跡 2 次
第 5 地区(618 集)



⑥内野遺跡 2、3 次(653 集)



⑦広瀬遺跡 1 次(865 集)

Fig.7　周辺中世村落遺構配置図１（１/1,600）

北側の入部遺跡周辺では11世紀からの中世集落が検出されている。７次45区⑧と10次53区⑨は東入部遺跡の南端に位置し、室見川が西側へ大きく蛇行し11世紀代には埋没したと考えられる旧河川との間に挟まれた低位段丘面に立地している。この調査区では11世紀から12世紀代には廃絶されたとみられる中世集落が検出された。また、古代の居館とみられる遺構も検出され、晩唐三彩、越州窯系陶磁器、緑釉陶器など上品の遺物も出土している。奈良時代に築造し、中世集落が形成された11世紀には埋没したと考えられている幅２ｍで条里に沿った方向で直線的に延長していく溝も検出された。

12世紀代になると入部や北側の田村遺跡で条里に沿った大溝が築造されるようになる。これによっ

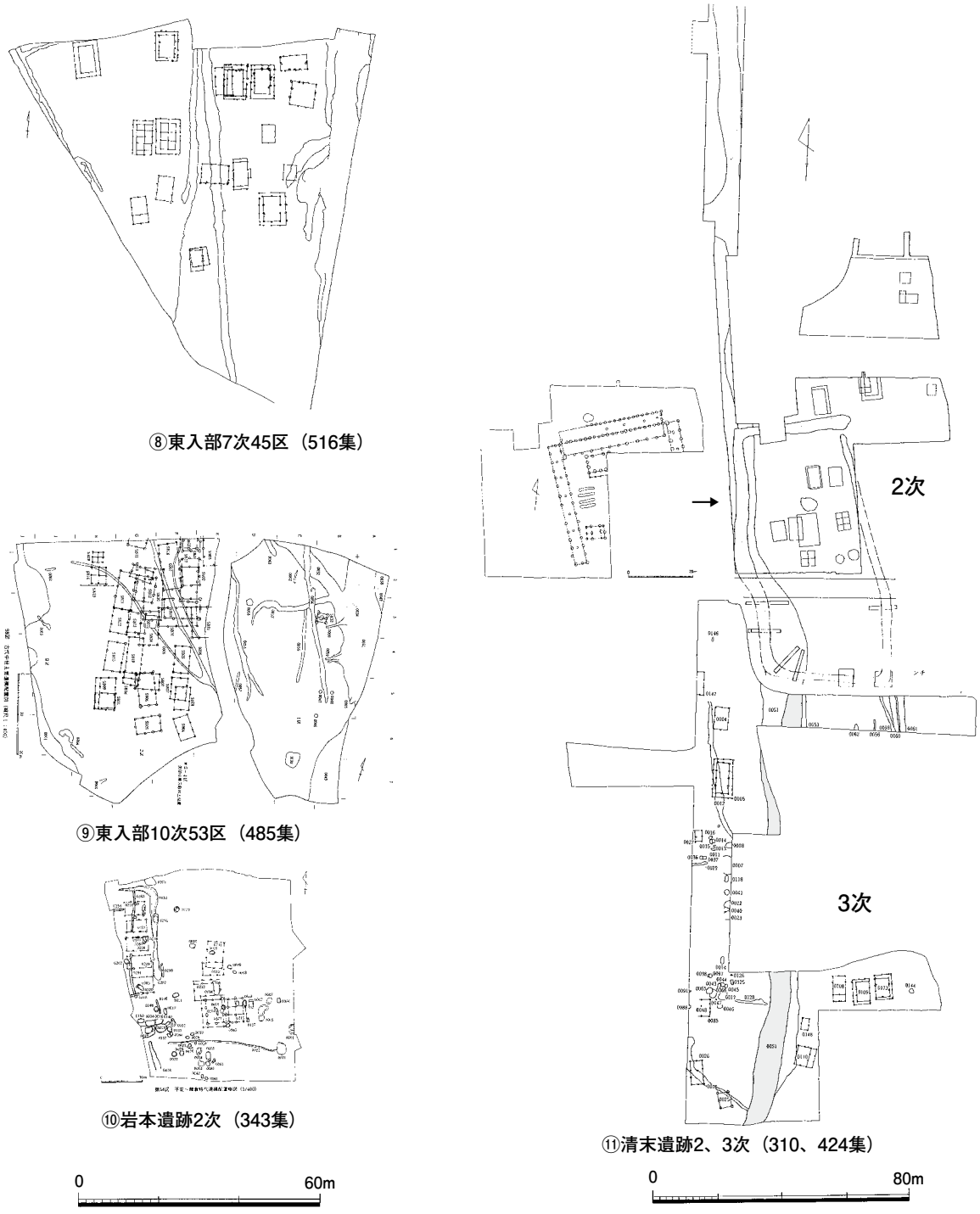


Fig.8　周辺中世村落遺構配置図２（１/1,600、１/2,000）

て耕作の集約化が進行し、集落も再編されたと思われる。上記の７次45区、10次53区の集落が12世紀前半くらいまでに廃絶されたことはこの動向に則した可能性がある。

清末遺跡第３次⑪では大きく３時期の遺構が検出された。12世紀中頃にコの字形に長舎で囲む律令期の官衙的な建物が検出された。その後、12世紀後半になると条里に沿った大溝が掘削され、掘立柱建物が建ち並ぶ集落が形成された。さらに14世紀初頭になると条里方向の大溝は埋没し、大溝と重複し幅３～５ｍの濠が内法で東西30～35m、南北75mの方形区画を囲むが14世紀後半には廃絶されたと考えられている。12世紀代と考えられている官衙的な施設は類例を待たなければならないが、「政

所」のような荘園の現地支配機関も考えられないだろうか。なお、近接した字名に「政留」がある。また、この官衙的な施設と方形区画溝に囲まれた居館的な施設が時期は異なるが近接していることから関連性についても留意したい。この館にどのような階層が居するものか不明であるが在地の荘官に任ぜられた小領主クラスも考えておきたい。

入部遺跡の東に近接した岩本遺跡第２次調査⑩では３期に分けられ、１期（12世紀前半）は浅い溝で区画された内部に主屋と納屋のような２棟の掘立柱建物が近接して建ち並ぶ状況がみられる。２期（12世紀中頃～後半）になるとⅠ期の建物の位置に棟の方向を変えて１棟増やした建物群と鈎形のプランを呈した溝に区画された内部に４棟の建物が整然と並んだ建物群が形成される。３期（12世紀～13世紀）になると主な遺構は焼土壙群となり集落は廃絶されている。この事例も12世紀後半代に条里プランに基づいた耕地の集約化、編成が進められ、屋敷も移転した可能性がある。また、主屋と離れた位置に溝で区画され並列した同規模の掘立柱建物の関係は「下司」、「上層百姓」などの荘官クラスと隷属して雑役や土地開発などを担った「所従」の関係を示している可能性がある。

以上、入部地区の集落の特徴として、11世紀後半代から条里プランに沿った集落がみられるが、12世紀後半代に条里プランに沿った大溝を築き大規模な潅漑や耕地の集約化が進められ、屋敷も再編成される地区がみられた。その後、14世紀初頭以降に濠に囲まれた居館が出現したが、この時期以降、一般的に集村化が進むといわれている。

14世紀後半以降の集落は集村化が進み、脇山・内野地区、入部地区ともに峯遺跡２次５区にみられるように、おそらく近世に継続した集落の付近に形成されたものと考えられる。この近世の集落は丘陵麓や丘陵谷部に多くみられ、近くに産土神社が祀られている。その中でも脇山の大門に祀られた横山三所権現は中核を占め横山郷八村の総社で脇山、小笠木村の産土神となっている。また、吉良氏は先の論考で脇山地区の水利と産土社が密接な関係をもつことを指摘している。

焼土壙について

入部、脇山一帯では木炭生産の窯と考えられる焼土壙が多数検出された。時期は12世紀以降と考えられている。周辺の山林から薪を調達し生産したものであるが、居住区の近くでも多く検出され、痩せて休耕した田地（片荒）においても生産された可能性がある。その生産は領主に年貢や公事として貢納され、また交易品として流通したものと考えられる。先述のように近世においては街道を通して肥前から筑前へ木炭が多く運ばれたという。